2025年度 仙台青葉学院大学 リハビリテーション学部リハビリテーション学科
入学試験問題

小論文

受験番号	氏名
------	----

【問題】以下の文章を読み、問1～2に答えよ。

「天才・篠田」と呼ばれた写真家、篠田登志雄さんは、高度先端医療センターでの検査の結果、こうがしゅ膠芽腫というグレード4（もはや手術不可能な段階）の脳腫瘍であると診断されました。すでに六つの病院が「さじを投げ」て、このセンターへたどり着きました。けれども、このセンターの最高度の医療をもってしても、完治できなことが分かりました。

また、篠田さんは、二年前からかれいおうはんへんせい加齢黄斑変性を患い、右目は完全に失明、左目もほとんど見えない状態でした。この目の治療の最中に、脳腫瘍が見つかったのです。余命は三か月だと言われていました。

ひと通りの病状説明を受けた後、彼は医師に問いました。

「病状は把握している。その上で俺は結論を知りたい。この病院は、日本が誇る最先端医療の現場なんですよ。その最先端にいるドクターに聞きたい。俺の脳腫瘍は治るのか。治らないのか。」

医師は改めて彼に向き合って告げます。

「はっきり言います。今の状態から完治は厳しい。ただあらゆる治療法を使って、腫瘍を切り取る。」

別の医師も言います。

「余命を延ばすことは可能です。」

篠田さんは、しばらく沈黙していましたが、自分自身に言い聞かせるようにつぶやきました。

「最先端医療でも完治はできない……。」

医師は「私はまだあきらめてない」と言いますが、篠田さんは、「治らないことが分かってよかった。これで、ようやく覚悟がついた」と、静かに腰をおろしました。「ここまで来るのに一か月も無駄に使っちゃったよ」と苦笑いしながら言いました。

そして、彼は医師に対して自分の希望を伝えます。

「頼みがあるんだ。いのちはいい。目の方を治してくれないか。研究段階のものでも何でも使ってもらって構わない。」

医師たちは絶句します。「ちょっと待ってください……。」

「一瞬でいいんだよ。この目を見えるようにしてくれないかな。」

医師は聞き返します。

「どうしていのちより目なんですか？」

「俺はファインダー越しにこの世の中を眺めてきた。助からないなら、もう一度だけ写真家に戻って、目の前の風景を切り取りたい。写真家として最期を終えたいんだよ。」

医師たちは沈黙してしまいます。

いのちか目か。読者のみなさんはどちらを優先したいですか。

自分にとって何が大事なのか。何を優先したいのかという問題は、①まさに QOL の判断ですね。(中略)

篠田さんは、その後、QOLをめぐる、医師たちとさらに深いコミュニケーションを重ねていきます。キュア（治療）と QOL という、本書の核心をなす理念が、象徴的に描き出されるのが、つぎの場面です。

後日、医師たちは、改めて篠田さんに状況を伝えました。目の手術で視力が戻る可能性は十パーセント、脳腫瘍の手術で余命が延びる可能性も同じ十パーセントだと。それを聞いた彼は、こう言いました。

「いのちと目。可能性が同じ十パーセントという偶然、ハハハ……面白いね。目の治療を優先してください。」

医師たちは、一瞬、言葉を失いました。医師の一人が、気を取り直して言います。

「脳腫瘍の治療を優先してください。患者があきらめても、医者があきらめるわけにはいかない。」

それを聞いた篠田さんは、苦笑しながらこう言いました。

「②君が救いたいのは、私じゃない。」

「どういう意味です？」

「そのままの意味だよ。君が見ているのは、私じゃない。」

「医者として、どんな状況であっても、だれ一人見捨てない……。」

「こわいのか？」

「えっ？」

「君は最初から頑なに、いのち、いのちと言っている。医者として、その信念が崩れるのがこわいように感じるが、気のせいかな？」

「……」

「それは俺もおんなじだよ。……最後に写真家でいられないことがこわいんだ。このまま暗闇のなか死ぬことが何よりこわい。写真を撮ること。それは、俺にとって生きることだ。」

出典：小林亜津子『QOL って何だろう 医療とケアの生命倫理』、筑摩書房、27-48、2018 年、一部改変

問 1. 下線部①「まさに QOL の判断」とはどういうことか、文中の言葉を織り交ぜて 200 字以内で記せ。

問 2. 下線部②「君が救いたいのは、私じゃない。」について、あなたが医療従事者になったときの考えを 600 字以内で述べよ。